

野上清生子全集

第十二卷

岩波書店

野上彌生子全集 第十二卷 第二十一回配本(全二十三卷)

一九八二年二月五日 発行

定価三〇〇〇円

著者 野上彌生子

発行者 緑川 亨

発行所 株式会社 岩波書店

〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目五番五号
電話 〇三上六五七四二二
振替 東京六上六二四〇

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

神様	三
転生	五
鍵	一九
こころ	二七
ミシヨンカのうた	二七
笛	二七
鈴蘭	二五
後記	三七

小
說
十二

神 様

別荘村の組合の庶務主任の竹田は、植村たちの仲間には神様で通つてゐた。他にもいろいろあるこんな渾名は、ミスタ・コリンスの場合が示す如く、浅間の煙のやうに自然にいつとなく湧いて、高原の彼らの夏の生活ときり離されないかたちでひろがるところも同じく噴煙に似てゐた。テラスでの午後のお茶の時、誰がつけたかの詮索がおもしろ半分にはじめられると、嫌疑はまづ佐々木にかかつた。「厭だなあ、先生、いたづらは悉く僕ですか。」

さう抗議すればするほど彼と極まるのであり、今度の渾名も伝はつたほやほやの頃には彼の仕業にされた。

「いけないわねえ、すま子さん、少しお灸をすゑておあげなさいよ。」

夫の隣りの椅子から、和子が佐々木の若い妻にわざと厳格に注意すると、すま子はヘップバーン風に浮かべた口もとの微笑を白い紅茶茶碗の金縁で隠した。その仕方、神様の製造人は却つて忠告者であり、植村も、或る場合佐々木以上に口のわるい妻のいたづらを知つてをり、二人ですま子に黙つてゐる約束をさせてゐるのだ、と佐々木はすぐ悟り、彼自身も肯定のしるしにからから笑ふのであつ

た。

竹田は、組合制度で維持されてゐる別荘村の事務の主任でありながら、おそろしく非能率的であつた。それも怠けるとか、ずぼらとかいふのはまた様子が違ひ、用事があつてもてんで捉まらないのであつた。H大学の事務室の隅つこに机を一つ置かして貰つて、それがいはゆる東京の支所で、電話も学校のと共通だから容易にはかからない。やつとかかつたと思へば、まだ来てゐませんである。お昼頃は昼飯に出てをり、午後は、もう帰つた、と学校の用事でもない通話を、一つでも余計に取りつがされるのを怒つてゐる電話女が、邪険に突つばねる。仕方がないから手紙か葉書にする。何通書いても、空気に矢を射こんだみたいに手ごたへがない。思ひあぐねて大学に訪ねて行くと、

「竹田君は、なんでも山に行つたやうですよ。」

と、これが事務室の人から貰ひだす返事である。

「いつ頃帰るのでせうか。」

「さあ。」

「自宅はどちらか、わかりませんか知ら。」

「さあ。」

運よくそれを知つてゐるものにぶつつかつても、教へられるのは飛んでもなく辺鄙な郊外であつた。

「竹田さんには全く困つちまいますわね。」

今度の夏休までには湯殿を拵へたいとか、テラスの朽ちた柵を取り換へたいとか、壁の落つこちたのを修繕したいとか望む奥さんたちが、どうかして東京で落ちあひ、山の村の話になると、一番にそれがでるのであつた。彼女らのひそかな妬みは、大学関係の人たちは、とにかく膝許に彼をおいてるわけで、特別の便宜を得てゐるに違ひない、といふことであつた。しかし竹田を捉まへにくいのは、彼の仕事机のある事務室から月給袋を配られる教師とても、一般の組合員と大差はなかつた。もしどうしても彼を引つ捉まへてやらうとすれば、時間給の連中なら、袋の中の札が半分になる覚悟で、授業を棒にふつて、その部屋に張りこんでゐるほかはないであらう。

和子とすま子のあひだに同じ話題が出たのは、佐々木の山荘で、もう二年越し頼んであるホールの床板の一部の陥落をまだ直してくれないので、さかんに反ねまはりだした一人児のために、危なくて仕方がない、といふ話からであつた。

「佐々木に申しますと、あんな男を探して歩く暇が僕にあつたら、ちよつと持つて来てくれなんて、まるで書物か、お菓子みたいなことをいつてゐますの。」

「お菓子はよかつたのね。」

和子は笑つてしまひ、向ふの岡のA山荘の奥さんも、昨日不平をもちこんで来て、いつたい理事会がおとなし過ぎるから、竹田みたいな事務員に勝手な真似をされるのだ、とぶんぶんしてゐたのを伝へた。たしかにその憾みもなくはなかつた。しかし竹田は、村が出来てから三年目に亡くなられた、

もとの学長の遺族で土地の所有者なるN家にむしろ属した人間で、土地分譲の問題などになると、組合とN家とのあひだの便利な楔であり、一方それほど不行届な癖に、会計報告などはきちんと辻褄をあはせて、尻つぼをだすやうな下手はせず、ものによると誰も及ばぬ働きを見せるのは、腹をたてる奥さんたちにもわかつてゐた。ただ閉口するのは、そんな仕事をして貰へる、貰へないより、はじめいつた通り、彼が決して捉まへられないことであつた。

「ですからAさんの奥さんに、私は昨日申しましたわ。」

と、和子はなほ笑ひ笑ひつづけるのであつた。「竹田さんは神様なんですよつて。さうでせう。どこかへゐるに違ひなくても、私たちにはなかなか捉へられないのですからね。神様がらくに誰にでも捉へられたら、それこそ不思議だし、殊に手紙や葉書にいちいち返事を寄越したり、電話をかけて来たりしたら、世界の騒ぎですわ。」

しかし、この神様も、誰かが新らしく土地を買ひたいとか、家を建てたいとか、建つてゐる家を譲り受けるとかで、自分にもかなりのお賽銭があがる場合には、忽然と姿を現はすのであつた。そんな客を案内して、別荘村のまだあちこちに残つてゐる分譲地を見せて歩いてゐる竹田に、十遍も電話をかけ、同じくらゐる手紙を書いたAさんの奥さんの仲間の、たとへば、Bさんの奥さんがぱつたり出逢ふ。すると竹田は、そんなことはまるで忘れてゐるやうにけろりとして、却つてさも懐かしげな笑顔でちよこちよこと駈け寄り、真新らしい夏帽子をとつて、鄭重にお辞儀をする。

「これはこれは、奥様、御無沙汰を申し上げてをります。先生ももうこちらでいらつしやいますか。」

つんとした奥さんが、それには答へず、手紙や電話のことをいひかけると、彼は一層深いお辞儀で平あやまりにあやまつてから、さて、上手な弁解をはじめるのであつた。

「実になんとも皆様に申しわけがないのでございますが、この夏は十軒ほど建築がありますので、やれ青写真だ、資材だ、水道のパイプだ、登記だ、電燈会社との交渉だと、もう朝から晩まで一人で駆けずり廻つてをりましてね、学校の前を通つても、ちよつと事務室に寄つてまいる暇さへないのでございますよ。おひおひ暑中休暇も近づけば、皆様からもいろいろ御用命があるに違ひないし、お電話やら、お手紙やら頂戴いたしてゐることと、それを思ひかけますと、気が気ぢやないのでございますが、全くそんなわけでもございまして、お詫の申し上げやうもございません。しかし夏休ちゆうは、私もこちらにゐるつもりでございまして、早速大工の方へ手渡りまして、——ですがね、奥様、あの連中もこの節はなかなかずるくなりましたよ。家の一軒といへばすぐにも始めたがる癖に、ちよつとした直しものや、模様変へには逃げを打ちますからね。私もあひだで苦勞いたします。」

彼自身こそ逃げの手を打つてゐるので、これらの慇懃な言葉やお辞儀は、いはば烏賊の墨汁だといふことは奥さんも知らないではなかつた。しかし竹田のこんな時の、もの柔らかい声の調子はいかにも真実さうであつた。中肉で小柄なからだに清潔な夏服を着て、後あたまが靴べら位うすく禿げかけ

て来たのを、長い栗色めいた猫毛で手際よく隠してゐるその四十男は、服装と同じに整つた顔で、母親はくろうとでもあつたかと思はれる二皮臉の、險毛の濃い艶のある眼をしてゐた。相手がそんな奥さんの代りに、どの山莊かの短気で聞こえた主人で、浅間の爆発ほどごうごう論じ詰めてどなりたてようと、その眼でただにこにこして、絶えずお辞儀をして急場をやり過すや否や、忽ち天に翔けるか地に潜るかで行方不明になるところは、神様もエホバではなく、異教のアケルスの妖しい超自然力をもつてゐるかのやうに見えた。奥さんも運よくめぐり逢つた彼を取り逃がさないためには、それこそヘラクレス流に、遮二無二引つ張つて来るほかはないのを知つてゐた。しかし向側で、話のすむのを待つてゐる人たちを残して、そんな無作法もできなかつた。竹田にはそれがなによりの機会であつた。明日は必ず訪ねて行くと約束する。

「午前はちよつとむづかしいかも知れませんが、午後には間違なく——左様でございますね、二時にお伺ひいたしませうか。丁度よいところでお目にかかりまして。先生にも何分よろしく。」

最上の敬意と、最後の深いお辞儀で竹田は去つて行く。彼の事だからと疑念はあつても、自分からあれ程いつた以上は、と思ふ気持ちに打ち勝たれ、予定してあつた明けの日のピクニックまでやめにした奥さんは、夏の長い午後いつばい待ちに待つて、やつぱりすつぽかされたことがわかる。さすがに腹にすゑかね、もう暮れかけた山路を、却つて食事中をねらふつもりもあつて、三十分はたつぷりかかる駅前の事務所へ急いだ。竹田は来てゐるあひだはその二階に泊まるのであつた。しかし、見あげ

た窓には火影がなく、階下で残り仕事をしてゐた事務員の岡部はもつそりいふ。

「竹田さんは今朝の一番で、お客さんと一緒に東京に帰りました。」

口惜しさ、腹立たしさに、まつ暗になつた夜路の怖いのも忘れて帰つた話を、和子に訴へた奥さんは、重い溜息でつけ加へる。

「まつたく、相手は神様だとも思はなけりや、諦らめがつきませんわ。」

しかし、彼女らの困るのは神様だけではなく、その下にゐる岡部、深井の二人がそれぞれ御本尊の屬性を具へてゐることであつた。ひとつは、日華事變の進展につれて生じた社会意識の一般の変化が、彼らの持ちまへの傾向に抛りどころを与へたわけであつた。それまでは、別荘村は特権階級であつた。もつとはつきり解剖すれば、それからずつとかけ離れた駅前、三十戸足らずかたまつてゐる住民は、どれも一軒づつしかない、大工でも、八百屋でも、肴屋でも、雑貨屋でも、豆腐屋でも、別荘村が人つ気のなかつた高原に忽然と現れたことによつて、鍬が鎌を呼び、春が鳥を誘ふと同じ自然の必要から寄つて来たものであつた。その点、溪流の向側にある炭焼の村や、二三里から四五里も隔たつて散在する、その他の山麓の古い村とは違つてゐた。大きな寺院を中心とする門前町や、地の底からの偶然の湧き湯でつくられた温泉町とは、また別な目的と形ながら、人間の聚落がどうして出来あがるかの、それは小さい雛型といつてよかつた。それだけに、彼等と別荘村との結びつきは、樹の幹と枝であつた。わけても事務所に勤めてゐる二人は、岡部の方は炭焼の村の親の家に妻子と同居しながら通

ひ、深井は駅前小さい家をもつてゐたが、いづれにしても、彼らは別荘村のものと自分でも思ひ、周りからも思はれてゐた。しかし、それはそれ、これはこれであつた。草分の仲間が抱いて来た赤ん坊が白筋の学帽をかぶるほどに年月がたち、時代は變つたのである。カーキ色の軍服で出征する集団に華族も屑屋もないと同じく、別荘村の人間が特別なものである筈はなかつた。彼らの哲学は、そこいらの半ぼけの爺さんでも、日傭稼ぎが二三十円になり、馬車曳きが一日きれいに百円儲け、炭焼でも月末にはその札を五六枚はぼろのポケットに突っこむのを見るにつけ、早速体系が出来て、実践に移された。

もとは夏の季節にはひると、高原電車が着くたびに彼らは目のまへの駅で、新らしく来る人待ち受けた。さうして鞆があれば鞆を、重い行李なら行李を、一二台はそんな山の村にも動いてゐた自動車呼んで、丁寧に運びこんでくれたものであつた。ガソリンの不足で乗物がなくなつたあとでも、誰かに持つて行かせるとか、自分たちがあとで自転車に付けてとどけるとかの奉仕を、決して怠りはしなかつた。しかし、拵がらせない筈の戦争が中国から太平洋にまではみだすに従ひ、彼らも忠実な国民として政府の方針に倣ひ、自分たちの新らしいやり方を拡大したわけである。

戦争を心棒にした世上のあらゆる機構が、その頃は制動機の利かない機械のやうに、くるくる空廻りをしかけてゐた。またそれだけにやかましくなつた唸り声や吠え声は、その歯車の些やかな歯でありネズである隣組につねに襲ひかかつたので、奥さんたちがその中を脱けだすのは並たいていの苦心

ではなかつた。それからむづかしいキップを手に入れ、立ちづくめの汽車で死ぬ思ひをした末、どうにかなつかしい夏の村の駅に足をおろす。気の早い奥さんは、四月のドゥーリツル機の侵入から察しられる今後の危険に備へて、例年はないほど沢山な荷物をもつてゐる。しかし、それをどうして山荘まで運んで行かう。

事務所では、土足で踏みこめるやうになつた板張の部屋のまん中に、一と月まへやつとストーヴと取り替へた、半畳はある木づくりの大火鉢が据わつて、まつ赤にやまになつて起つた炭火でぐらぐら沸つてゐる大薬罐をさし挟んで、岡部と深井が、どちらもぢか足袋の爪先を火鉢の縁にかけ、悠然と椅子に倚つてゐる。竹田が神様でもなかなか愛想がよいやうに、この二人とても決して無愛想ではない。すぐお茶を汲んで勧め、汽車の混雑に同情し、東京の土産話に耳傾ける。それはエティケツト以上で、聞かせる気なら三時間でも神妙な聴き手になつたであらう。戦争が本格的になつてからは新らしい別荘の建築もなく、竹田もおもに東京で、留守役の彼らは、そこをよい倶楽部にして集まる駅附近のものと話しこんで暮らすために、毎日出勤してゐるのであり、ラヂオも新聞も伝へぬ東京の内証のニュースは、消息通として威張れる材料であつた。

しかしその場合も、それはそれ、これはこれである。東京話がすんで荷物のことになると、二人とも首を傾げる。

「さあ、届けさせるやうな人はないのですがねえ。この節は誰も彼も出征で、残つてゐれば工場行

で、まるで男つ気がないのですから、お持ちになつていただくほかはありませんね。」

「荷馬車の便なんか、頼めないか知ら。」

「奴等は、今度鬼の押出へ行く途中に建つ陸軍の兵舎の材料運びをやつてゐますので、いつ積んで行つてくれるかわかつたものぢやないのです。」

仕方なく、急がないものは倉庫に入れてもらふことにし、脊中にしよつたリュックサックのほかに、重い包みを両手にもつて、とぼとぼと山荘の方の路へ踏みだして行く奥さんたちを、二人は相変らず悠然と椅子のまま見送る。しかし末社もお賽銭次第であるのを、彼女たちはやがて発見した。自分たちにはあんなつらい思ひをさせた荷物が、どこかの山荘には、昔ながらに、岡部か、深井か、どちらかの自転車の後に乗せてとどいたり、貨車でついた疎開の家財家具が、早速荷馬車でごとごとと曳きこまれたりするのであつた。

「お聞きになつて。Xさんのところのお荷物は兩戸まではづして来たといふのに、みんなただなのですつて。ええ、もちろんお役所の方からですよ。」

「さういへば、Yさんでも会社のトラックで来たやうですわね。」

「それぞれの便宜で、今はそんなことも仕方がないにしろ、事務所までその手で引つかき廻されては困るわ。」

「さういつちやなんですけれど、チップを釣りあげたのはあんな人たちですよ。私たちの村の建前

として、はじめは、個人的にはチップをやつてはいけないことにしてあつたのですもの。情実の出来るもんだといふので。」

「傾向の違つた人たちが、だんだんふえましたのね。」

一方の奥さんたちがこんなひそひそ話をする時、どこかでは、また、他方の奥さんたちが語りあふ。「当節のことですもの、人を動かさうと思ふにはそれだけのことをしてやらなけりや動きはいたしませんわ。」

「いつたい、大学の先生なんてお家は、奥さんたちまで理窟で行かうとなさるのね。」

「それなのですよ。事務所が不親切だなんて攻撃するより、親切にしなけりやならないやうにさせればよいのですわ。」

かう書いたことによつて、別荘村が二派になつて対立してゐるのであらう、と仮にも想像する人があれば大間違である。この場合とても、やつぱり、それはそれ、これはこれである。彼女らの和やかな交際には揺るぎはない。さうしてクラブの食堂で落ちあつたり、森や池の周りの散歩で出逢つたりすると、いつ脱けて来たか、隣組がやかましく掣肘しなかつたかを、親しげな笑顔で、たづねあひ、また疎開の荷物の手廻はしのよさをほめる。

ついでに書くと、この土地ではほめるのはいくらほめてもよいが、悪口はいつてはならない。よその場所でも大抵さうしたものであるが、ここは特別である。それも別荘村の仲間なら大してさしつか